

## 「高等教育機関における『障がい者の生涯学習』提供モデルの開発 ：モデル開発に向けたニーズに関する実態調査」報告

○近藤 尚也、志水 幸、白石 淳

(北海道医療大学看護福祉学部/北海道医療大学先端研究推進センター)

目的 高等教育機関における障がい者の生涯学習の機会提供に関するモデル開発を目指し、その基礎資料とするため、障がい者（主に知的障がい者）にとって、どのような生涯学習の機会が求められているのか、そのニーズについて明らかにしていく。

調査 1：北海道における特別支援学校教員へのヒアリング調査 概要

調査 2：障害福祉サービス事業所がとらえている生涯学習ニーズアンケート調査 概要

調査 3：障がい者本人がとらえる生涯学習へのニーズアンケート調査 概要

### 倫理的配慮

北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 20N039047）。

本取り組みは、2021 年度北海道医療大学先端研究推進センター採択課題として実施した。

### 調査 1：北海道における特別支援学校教員へのヒアリング調査 概要

#### I. 目的

北海道における知的障害を対象とする特別支援学校教員を対象に、教員がとらえる学校卒業後の知的障害者の生涯学習のニーズについて明らかにすることを目的とした。

#### II. 研究方法

北海道内の高等支援学校及び特別支援学校高等部 7 校を対象とし、回答者（進路指導担当教員または管理職）に半構造化面接（対面形式およびオンライン面接方式）によるヒアリング調査を行った。回答は高等支援学校 5 校（札幌近郊 3 校、地方地域 1 校）、特別支援学校高等部 2 校（地方地域 2 校）より得ることができた。

#### 主なヒアリング内容の項目

基本情報、生涯学習へ求める内容、生涯学習の際に必要なと考えるサポートや工夫、学校教育からの学習の連続性、生涯学習を進めるにあたっての課題、把握しているニーズや課題（本人、保護者）、学校が持っている卒業生に関する生涯学習の取り組みの現状やニーズ情報、生涯学習に関する情報提供のあり方。

得られたデータは、逐語録にして、設問ごとの回答からセグメントの要約を行い、マトリックス表に整理した。さらに、セグメントの要約内容から、セグメントグループの再整理を進め、カテゴリー分類を行った。なお、補足資料として、該当校の学校要覧についても確認した。

表1 カテゴリーごとの回答

カテゴリー	A	B	C	D	E	F	G	
種別	高等支援学校	高等支援学校	高等支援学校	高等支援学校	特別支援学校高等部	特別支援学校高等部	高等支援学校	
地域	札幌市近郊	札幌近郊	札幌近郊	地方地域	地方地域	地方地域	地方地域	
寄宿舎	あり	なし	なし	なし	あり	なし	あり	
進路割合 一般就労	3分の1	4分の1	4分の3	2分の1	まれ	まれ	3分の2 (進学含む)	
進路割合施設・福祉的就労	3分の2	4分の3	4分の1	2分の1	ほとんど	ほとんど	3分の1	
部活動	あり	あり	あり	あり	なし	なし	あり	
同窓会活動	あり	年に2回(近年はコロナで実施できていない)	年3回たよりを送付	あり	年に1回(多い時は100名ほど参加)	あり	実施に至っていない	
実施場所(アクセス)	・住んでいる地域	・知っている地域だと自力でも移動できるが、そうでない場合は難しい(送迎バスなどもあるとよい)	・生活圏で実施されるとよい。生活圏と遠くと距離的には近くてもハードルがある	・行きなれた場所(学校や地域の会館など)が良い	・住んでいる地域(近隣)が良い	・送迎があるとよい	・居住している地域	・校舎を活用した活動。・行きやすい場(交通利用の在り方は個人差がある)
費用	5000円~10000円程度までなら出せる	できるだけ低額	低額または無料		低額または無料	低額または無料		
内容	・資格の取得など(業務につながる)。(働いている企業の後押しなどがあってもよいのでは)・お金の使い方・調理など自活につながる	・介護で働いている人は資格を取りたい。パソコン関係などは簿記を取りたいなどの声も聞かれる。・人間関係におけるストレスの削ぎの在り方(メンタルトレーニング)・出会いの場としての役割・楽しみ方の場としての役割・家から離れて生活について(金銭管理、健康管理、食事など)	・今後のスキルアップ(資格)・自由時間の使い方・定期的に開催されている方が集まりやすいのではないか・常時入れれるきっかけを作るもの、大きなテーマとして実施するものを整理する	・学校で学んだこと学び直しができることではないか(忘れてしまうことがある)・人間関係やコミュニケーションについて・ビジネスマナーなど一般常識の確習(ロールプレイ体験)・教養として健康管理	・健康面に関すること(体重の増加)・内容を選択できる環境があることよい	・社会に出るための経験(アルバイト・バザー、職業体験など)・コミュニティスクール	・自立する心につながる	・社会生活のイメージ形成
生涯学習へ求めること(ニーズ)と課題		・家で過ごすことが多い(スマホなど)	・入口について本人の自己受け止めによって変わるのではない	・連絡が取れなくなる卒業生がいる(何をしているかわからない、暮らしが見えないケース)	・地域によって選択肢が少ない	・生徒によってギャップ(違い)がある	・できる力はあっても気持ちの面からやりたがらないことがある	・仕事に慣れてこなすことで手一杯ではないか
生涯学習における課題	・キャッシュレスが進み、実感が減ってお金を使わずに済む	・情報や伝えるだけでは足りない	・そもそも生涯学習に対する関心が弱いのではない		・続ける場、時間、機会がない	・できる力はあっても気持ちの面からやりたがらないことがある	・困り感がうまく伝えられる	・興味をプラスしてどうしようか
必要なサポート	・本当に打ち込みたい人、初めての人などそれぞれに合った対応	・送迎バスなどのスポンサー(費用が高額だと参加しづらい)	・親も安心して送り出せる場所	・子どもによって異なる(障害が重い場合は、表示や場所の工夫など)	・自閉的な人は定期的に行われる活動がよいのではない	・サポートにはマンパワーが必要	・自らの場合、家族も含めた時間帯のマッチ。	・興味をプラスしてどうしようか
学習の連続性	・本人が何をやりたいのかに気付けるきっかけ(部活動などに加わる体験を通じた自己分析)	・人とかかわりにつまずくことがあるため、その点に関する連続性	・部活について一部競技は卒業後にもつながる場合あり	・教材の例など学校で実施した形をいかに	・授業と同じような流れの方が入口としてよいのではない	・余暇・体育活動、休み時間のテーブルゲームなどを実施している(卒業後の活動へ)	・作業学習で取り組んだ活動はあまり結びついていない	・寄宿舎における指導とのつながり
学校教育との連動へ求めること(ニーズ)と課題	・からだを動かすこと成功体験が少ないことも多く、そうした体験を積み重ねること	・学校を卒業すると運動機会がなくなってしまう	・卒業後も行いたいがつながっているスポーツは限られているため、部活動で取り組んでいたことが卒業後できなくなる	・実施されている部活動の延長となる活動	・部活動はなく、そこでの連続性はない	・ウォーキングを取り入れて学校で実施、卒業後も進路先(事業所)で取り入れている	・スポーツ活動を通じた地域とのつながり	
運動やスポーツ関連	・部活動の活動を続けたい(バスケットボール、サッカー、陸上)が難しい	・参加できるスポーツ大会などがある	・マラソン大会を行っていたがニーズはあってもその受け皿がない	・スペシャルオリンピックなどのつながり	・卒業後に体重増加が多い。学校では運動の機会を意図的に作っているが、卒業後は運動の場がない。	・福祉サービスに通っている場合、その活動運動などが提供される。		
情報のあり方として求めること(ニーズ)と課題	・SNSなどを活用しているものも多いが、十分に情報につながることは難しい	・情報があっても本人の関心が弱いと参加にはつながらない	・情報が少なく届かない	・保護者間の情報が必要	・保護者間で情報を持っていることがある	・保護者が情報を集められる	・本人の手元に残る形式がよい(用紙やメールなど)	
学校が現在持っている生涯学習に関わる情報	出かけていない	・福祉サービスを活用した余暇活動などに関する(移動支援や放課後等デイなど)は、きっかけ作りの重要性	・福祉的就労は関連する活動があるが、一人でできる人(一般就労など)へのフォローは少ないかもしれない	・学びの続かなさがある	・困ったときは学校へ連絡する人もいる	・医療的ケア児のサポートをしているボランティア団体はある	・地域のクラブに入っている人もいる(多くはない)	
学校が受け取った本人・保護者からの声	本人の声 保護者の声	部活動の活動を続けたい(卒業生も参加している活動もある)	部活動の継続	調理活動(学校だと限られてしまった)	部活動を継続したい(サポートする側の役割も)	現在実施している活動の継続	思いはあると思うが聞けていない	
			息抜きや場として趣味や学習につなげる	働く場について落ち着いてから考えたい	子どもにとってメリハリがある活動(福祉事業所利用が多いため)	・在学中と同じような活動のリズムを希望。	思いはあると思うが聞けていない(学校の特性で親同士の交流が少ない)	

### III. 結果

基本情報に関して、卒業生の進路に関して学校ごとに違いがみられた。特別支援学校高等部では、障害が重度である傾向もあり、一般就労の割合が少ない状況であった。また、部活動について、今回

の対象であった特別支援学校高等部では実施されていなかった。卒業支援と関連して同窓会活動なども多くの学校で行われていた。

対象ごとのセグメントの要約内容から《生涯学習へ求めること(ニーズ)と課題》《学校教育との

連動へ求めること(ニーズ)と課題》《情報のあり方として求めること(ニーズ)と課題》と《学校が現在持っている生涯学習に関わる情報》《学校が受け取った本人・保護者からの声》の5つのカテゴリーに整理することができた。

### 《生涯学習へ求めること(ニーズ)と課題》

【内容】を中心に先行研究における項目から考察を行ったところ、「日常生活や社会生活に必要な技術の獲得や支援」といった自立生活を進めるうえで獲得すべき実用的スキルへの課題が示唆された。「日常生活や社会生活に必要な技術の獲得や支援」といった自立生活を進めるうえで獲得すべきスキルへの課題を感じており、先行研究においても指摘された学習を継続的に求めていることがうかがえた。

【実施場所】については、住んでいる地域や行きなれた場所など障害者の身近な地域で実施されることがすべての回答で求められており、開催場所に関するニーズと考えられる。知的障害者の生涯学習の機会そのものが少ないため、参加しやすい身近な地域で実施されることがニーズとして挙げられたと考えられる。

【生涯学習における課題】において、特に社会資源が限られやすい地方地域では、地域によって選択肢が少ないこと、ボランティアや場など地域資源に関するつながりが弱いこと、地域のカルチャーセンターなどはハードルが高いことなどが挙

げられており、参加しやすい環境の不足が示唆された。また、すでに地域にある機関等は、知的障害者にとって十分に社会資源化されておらず、社会資源が少ない地域でも、障害者の身近な場で参加できる生涯学習活動につながっていくことが期待される。

【費用】に関しては、ほとんどの回答で、低額や無料であることが求められていた。

【生涯学習における課題】では、活動への関心や、やる気、参加のきっかけとなる入り口の課題などについて挙げられていた。

### 《学校教育との連動へ求めること(ニーズ)と課題》

学習指導要領においても学校で取り組んできた内容や身に着けたスキルを卒業後につなげていくことが求められており、生涯学習と学校教育の学習の連続性を持つためには、学校と生涯学習実施機関にて十分な情報共有・情報交換を持つことも必要と考えられる。

また回答に共通して、卒業後の運動の機会の減少について挙げられているが、学校教育の中で運動やスポーツが継続的に行われていることも多く、運動やスポーツを学習の連続性の中で、生涯学習の一つの入り口として活用することは有効な取り組みになりうるかもしれない。

## 調査2：障害福祉サービス事業所がとらえている生涯学習ニーズアンケート調査 概要

### I. 目的

障害福祉サービス事業所がサービス利用者の生涯学習について、どのような情報を把握しており、また障害者の生涯学習のニーズをどのようにとらえているか明らかにすることを目的とした。

### II. 調査方法と対象

北海道内一定範囲(A地域とする)の日中活動系障害福祉サービス事業所を実施している事業所(主な対象は知的障がい中心)100事業所を対象とし、事業所における回答者の指定はしなかった。調査は郵送法による自記式質問紙を基本とし、同内容についてWeb入力回答も選択可能とした。調査対象は、WAMNET(独立行政法人福祉医療機構公開サ

イト) のオープンデータ (2021 年 11 月末時点) を活用して、対象とした A 地域内からランダムサンプリングを行った。調査結果は単純集計を行った。

### Ⅲ. 結果

100 事業所を対象として郵送したところ、55 事業所から回答を得ることができた (回収率 55%)。回答があった事業所 (55 件) の事業種別は、「就労継続支援 B 型」が最も多く 26 件、次いで「生活介護」14 件、「就労継続支援 A 型」9 件、「就労移行支援」5 件、「その他」1 件であった。

生涯学習に関する各設問への回答は以下の通りであった。

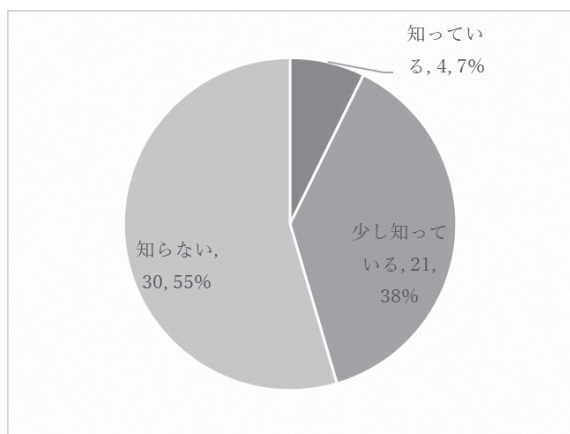


図 1 利用者が取り組む活動を知っているか (SA) n=55

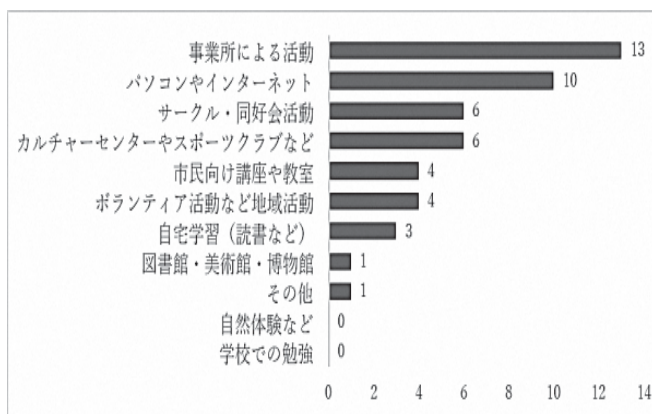


図 2 どのような活動に取り組んでいるか (活動を「知っている」「少し知っている」もの) (MA) n=25

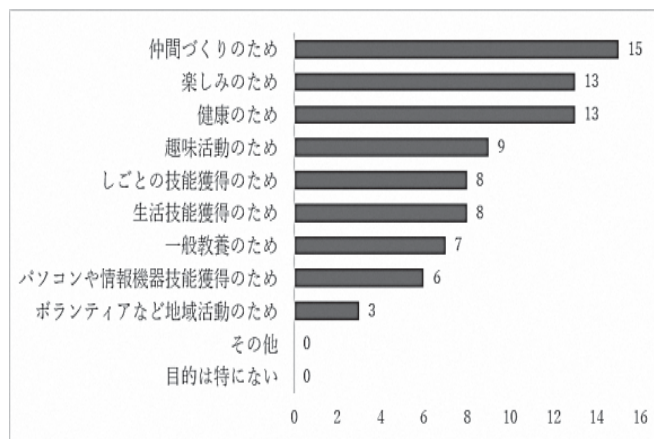


図 3 利用者が取り組む目的は何だと思うか (活動を「知っている」「少し知っている」) (MA) n=25

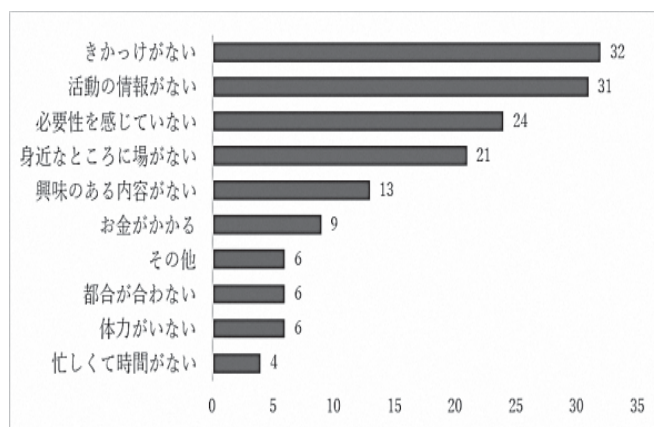


図 4 利用者が取り組まない理由は何だと考えるか (MA) n=55

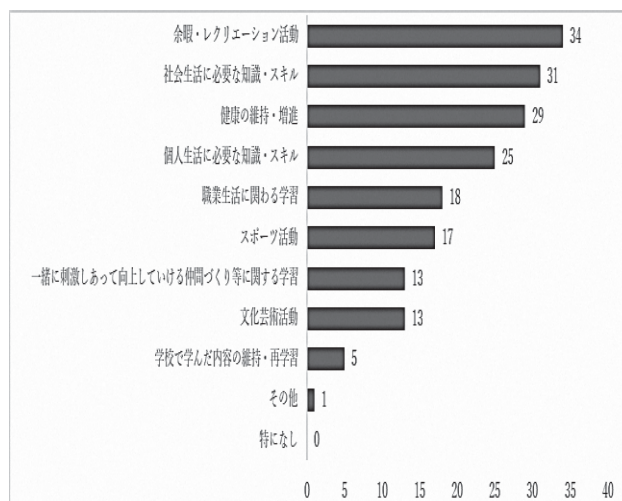


図 5 今後どのような目的の活動が提供されるとよいか (MA) n=55

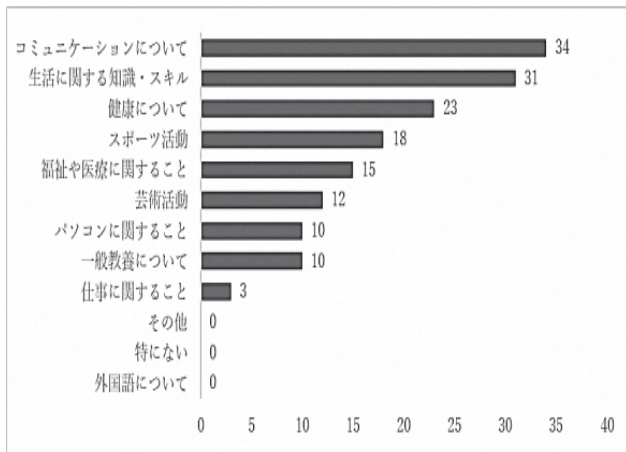


図6 今後どのような内容の活動が提供されるとよいか (MA) n=55

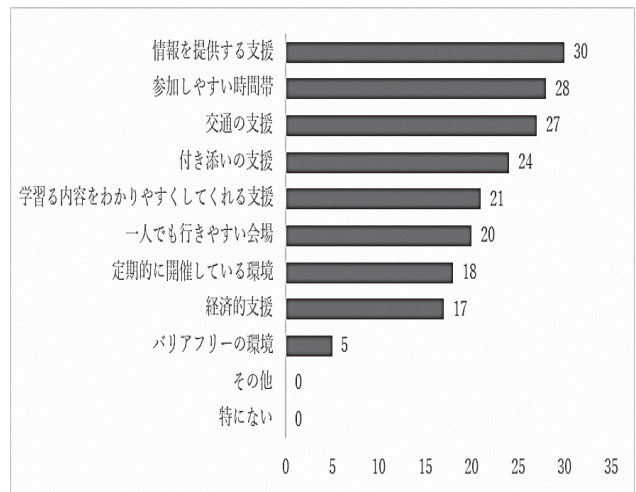


図8 どのような支援や環境があれば参加しやすくなると思うか (MA) n=55

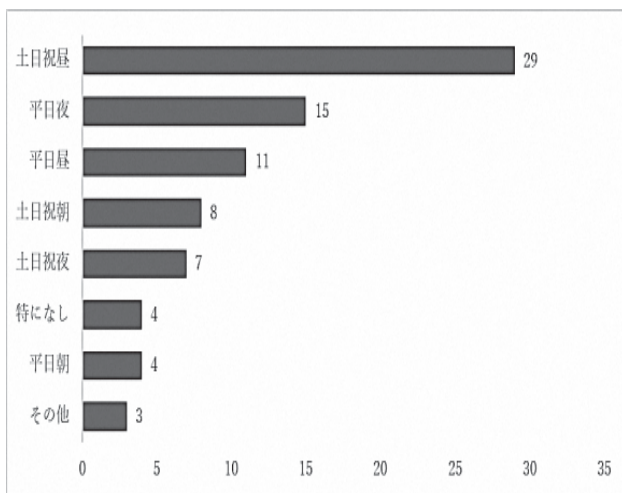


図7 どのような時間帯がよいと思うか (MA) n=55

### 調査3：障がい者本人がとらえる生涯学習へのニーズアンケート調査 概要

#### I. 目的

北海道札幌市近郊の地域における知的障がい者本人がとらえる生涯学習ニーズ及び関連した事業所外の生涯学習活動の状況についてアンケート調査を通して明らかにすることを目的とした。

#### II. 研究方法と対象

北海道 A 地域に所在する障害福祉サービス事業所 5 か所に調査用紙を送付し、事業所を利用してある知的障がいがある利用者への調査について協力を依頼した（機縁法）。調査用紙は、自記式選択

方式（単一回答：SA、複数回答：MA）を中心として、一部に記述の項目を設けた。調査用紙の記入は、本人が記入することを原則としたが、記入に支援が必要な場合には支援者等の手伝いを可能とした。得られた結果は単純集計を行った。

#### III. 結果

5 事業所に合計 100 件の調査用紙を配布したところ、4 事業所から返送され、回収された調査用紙は 57 件であった。

回答者の基本情報についてみると、「年代」は「30

代」が16名と最も多く、「40代」14名、「20代」11名と続いていた。「現在の住まいの状況」については、「家族と暮らしている」ひとが33名と最も多く、次いで「グループホーム」21名、「一人暮らし」2名、「無回答」1名であった。

### 1, 生涯学習活動の状況

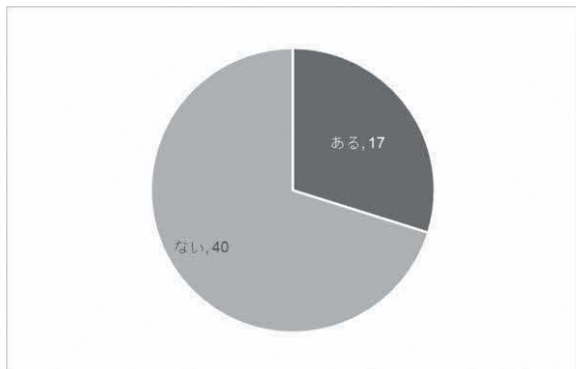


図9 事業所以外での定期的な活動の有無 (SA) n=57

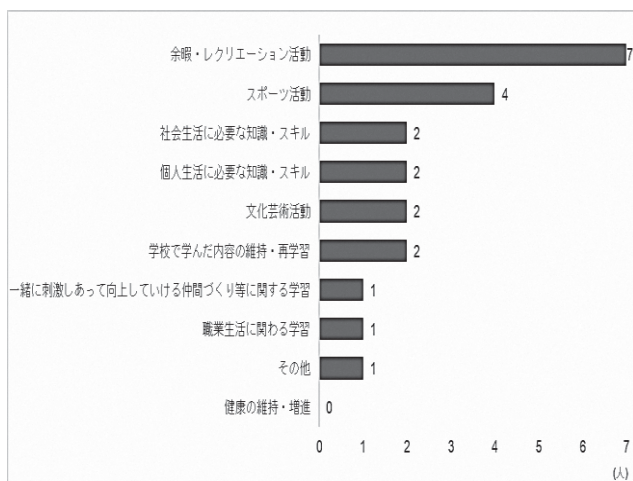


図10 どのような活動をしているか (図5で「ある」と回答したもの) (MA) n=17

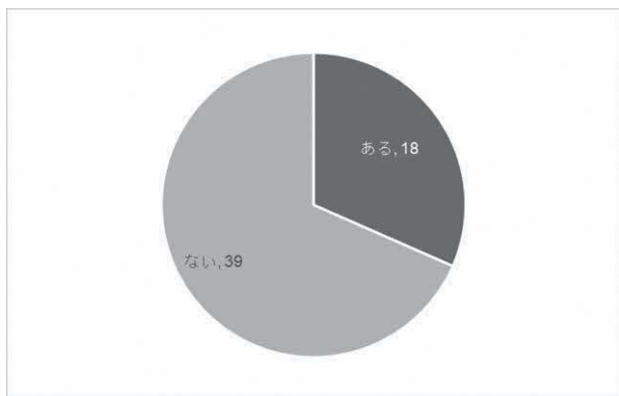


図11 最近1年の間で何か活動したことの有無 (SA) n=57

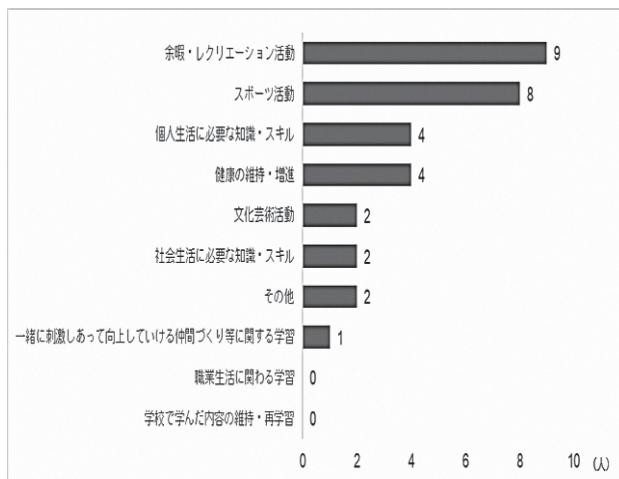


図12 どのような内容の活動をしたか (図11で「ある」と回答したもの) (MA) n=18

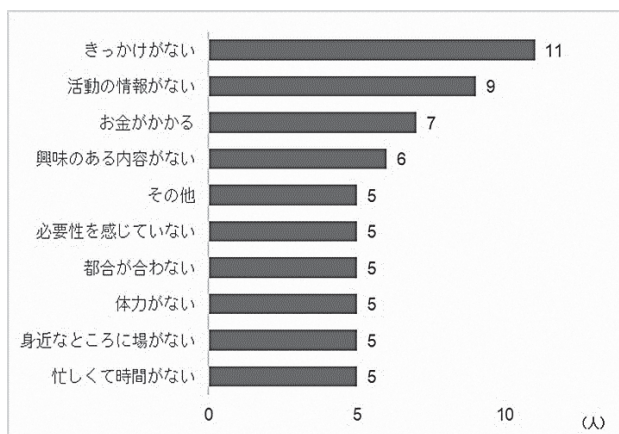


図13 活動をしなかった理由 (図11で「ない」と回答したもの) (MA) n=39

### 2, 生涯学習へ求めること

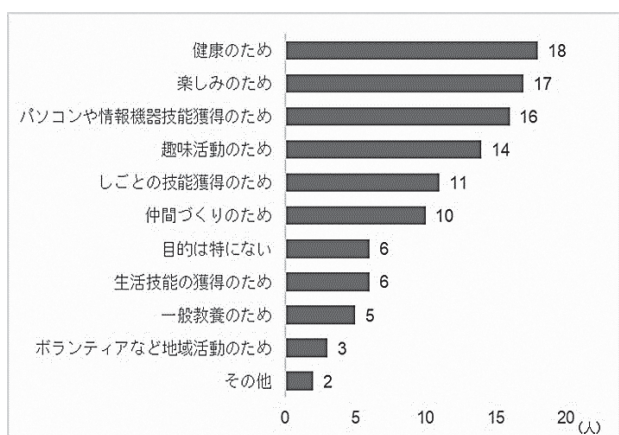


図14 これから活動をする場合の目的 (MA) n=57

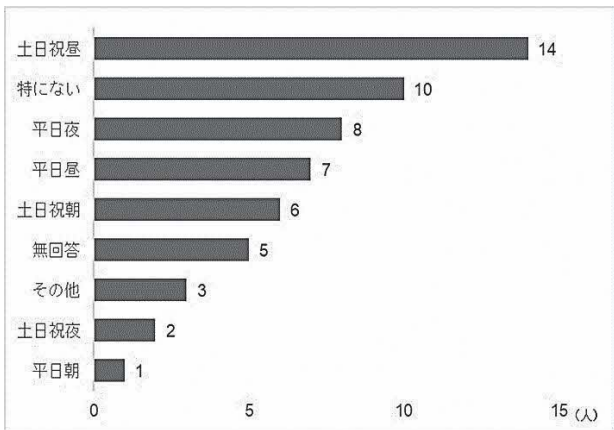


図 15 参加しやすい時間帯 (SA) n=57

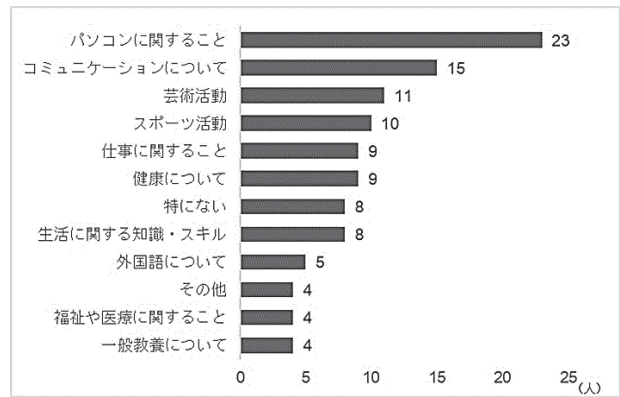


図 17 今後どのようなテーマがあれば参加してみたいか (MA) n=57

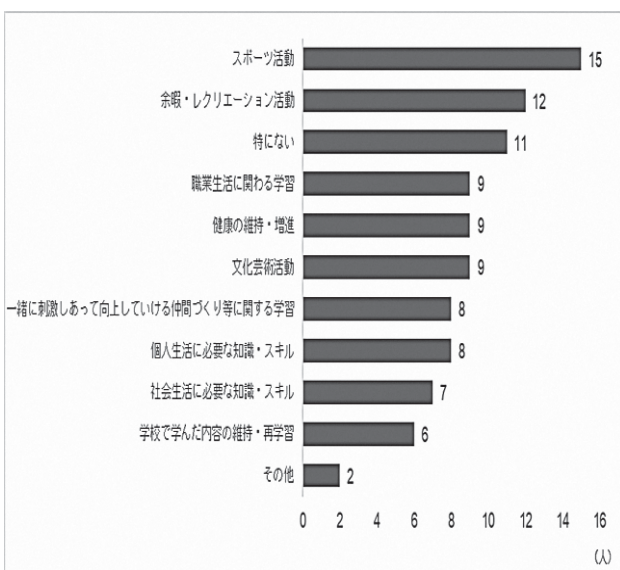


図 16 今後取り組んでみたい活動 (MA) n=57

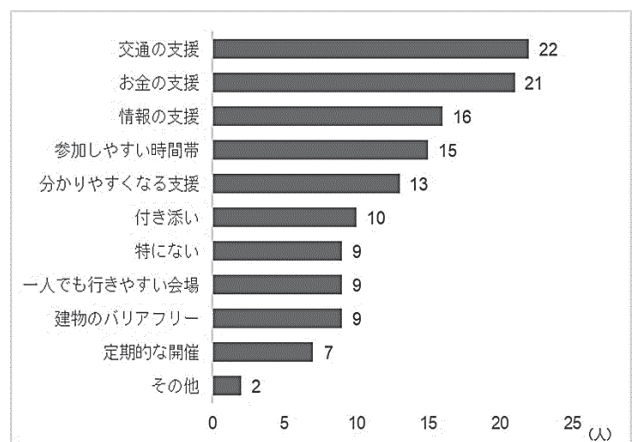


図 18 どのような支援や環境があれば、参加しやすくなるか (MA) n=57

※各調査の詳細については投稿論文として公開 (予定含む)

近藤尚也, 志水幸, 白石淳 (2022), 教員がとらえる知的障害者の生涯学習ニーズに関する調査—北海道における特別支援学校教員へのヒアリング調査から—, 北海道特別支援教育研究第 16 巻 (1), 33-44.

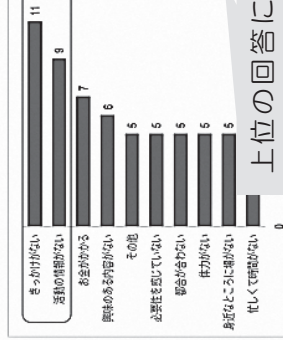
近藤尚也, 志水幸, 白石淳 (2022), 障害福祉サービス事業所がとらえている障がい者の生涯学習ニーズ—北海道 A 地域所在事業所へのアンケート調査から—, 北海道医療大学看護福祉学部紀要 29, 41-47.

近藤尚也, 志水幸, 白石淳 (投稿中 2023), 障がい者本人がとらえる生涯学習へのニーズと事業所外活動の現状—北海道 A 地域における知的障がい者を中心とした本人アンケート調査から—, 北海道医療大学看護福祉学部学会第 19 巻 (1).

# 当事者調査と事業所調査 の回答の回答対比 (抜粋)

## 当事者調査

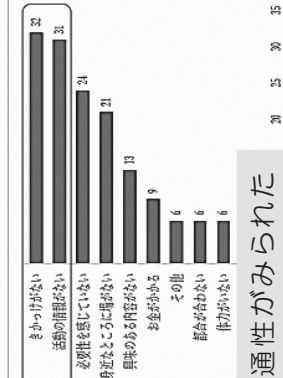
活動をしなかった理由（最近1年活動していないもの）(MA) n=39



上位の回答に共通性がみられた

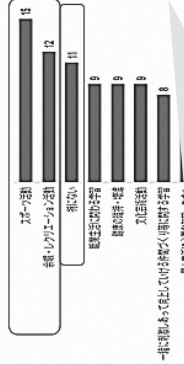
## 事業所調査

利用者が取り組みづらい理由は何と考えるか (MA) n=55



## 当事者調査

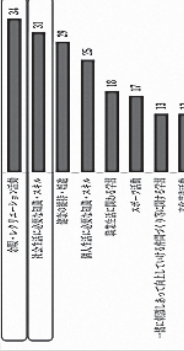
今後取り組んでみたい活動 (MA) n=57



当事者では「スポーツやレク」が高く、事業所もレクが高く共通。一方で、当事者「特になし」、事業所「社生活スキル」が上位にある

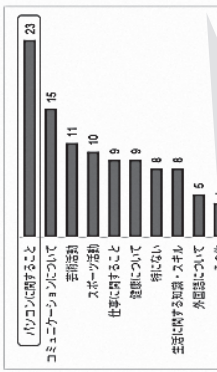
## 事業所調査

今後どのような目的の活動が提供されるとよいか (MA) n=55



## 当事者調査

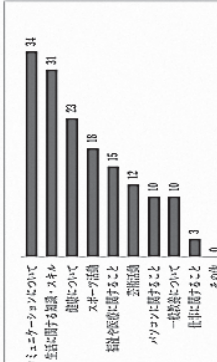
今後どのようなテーマがあれば参加してみたいか (MA) n=57



当事者では「パソコンに関すること」が高い特徴があった

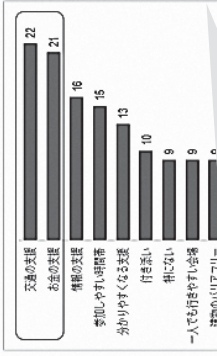
## 事業所調査

今後どのような内容の活動が提供されるとよいか (MA) n=55



## 当事者調査

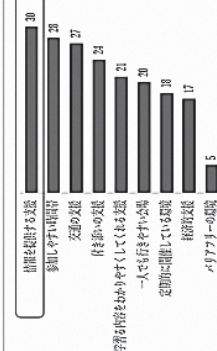
どのような支援や環境があれば、参加しやすくなるか (MA) n=57



当事者では「交通」「お金」が高いが、事業所では、「情報提供」が上位であった

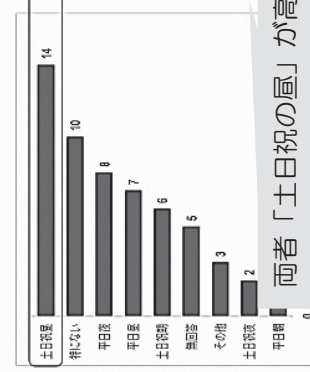
## 事業所調査

どのような支援や環境があれば参加しやすくなるか (MA) n=55



## 当事者調査

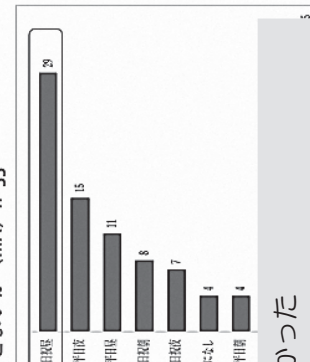
参加しやすい時間帯 (SA) n=57



両者「土日祝の昼」が高かった

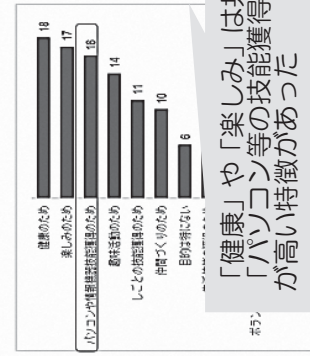
## 事業所調査

どのような時間帯に活動が提供できるとよいか (MA) n=55



## 当事者調査

これから活動する場合の目的 (MA) n=57



「健康」や「楽しみ」は共通して高いが、当事者では「パソコン等の技能獲得」、事業所では「仲間づくり」が高い特徴があった

## 事業所調査

利用者が取り組む目的は何だと思えるか (利用者の取り組みを知っているもの) (MA) n=25

